

2022.8.10

No.230



編集・発行人 樋口みな子

E-mail

minginga@agate.plala.or.jp

URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>

郵便振替「銀河通信」

02740-7-56535

(郵送年間2,000円)

野幌の空を見上げてウクライナの平和を願う

今年の夏は北海道も厳しい暑さです。いつもの夏なら夕暮れになると涼しい風が吹き快適でしたが最近では本州並みです。暑さだけでなく各地で大規模な洪水が起きています。江別で被害はありませんが、気候変動対策に国はもっと真剣に取り組んでほしいです。みなさまはお元気ですか？

7月10日は参議院選挙。投票日の2日前に安倍晋三元総理が銃撃されて亡くなりました。いかなる理由があろうとも暴力は許せません。選挙後に安倍さんを銃撃した犯人は旧統一教会に家庭を破壊され恨みを持って

成が多いかのような報道に疑問を感じます。

7月16日の朝日川柳を転載します。
西木空人選「入選句すべてが国葬関係」◆疑惑あった人が国葬そんな国(福岡県 吉原鐵志)◆利用され迷惑してる「民主主義」(三重県 毎熊伊佐男)◆死してなお税金使う野辺送り(埼玉県 田中完児)◆☆付度(そんたく)はどこまで続く あの世界で(東京都 佐藤弘泰)◆国葬って国がお仕舞しまいってということか(三重県 石川進)◆動機聞きゃテロじゃ無かったらしいです(神奈川県 朝広三猫子)◆ああ怖いこうして歴史は作られる(福岡県 伊佐孝夫) *一句、国会虚偽答弁118回。二、三句、批判句際限なく。四句、なぜ国葬か。五句、日本国の吊い。六句、テロリズム=政治目的のために暴力に訴えること。



7月盛夏 野幌の空

いたことが報じられました。

選挙で資金援助してもらったり自民党と深く関わっていたことが次々と報じられるようになりました。メディアはなぜ、投票前に事実を報じなかったのかと怒りを覚えます。さらに、安倍元首相の「国葬」をすると政府は発表しました。国葬には大反対です。いい人だったと礼賛を押し付けないでください。

安倍さんがした数々の悪政はなかったことにはできません。憲法違反の集団的自衛権の行使容認、安保法制の強行などで「戦争する国」づくりが進められました。「アベノミクス」で格差と貧困が拡大しました。国会での虚偽発言、森友・加計問題や「桜を見る会」で国政の私物化は許せません。森友問題では赤木さんを死に追い込んだ、公文書改ざんもありました。「国葬」は憲法が規定する思想・良心の自由に反します。

TBSラジオ「森本毅郎 スタンバイ！」が7月15日の放送で、今秋に予定される安倍晋三元総理の国葬について「リスナーの95%が反対」と伝えました。賛



大阪府の近藤久子さんの作品：STOP WAR (スノードロップ)

ロシアがウクライナに侵攻してもう5ヶ月です。なんの罪もない子どもや女性が虐殺されているというニュースに接するたびに胸が苦しくなります。病気の家族がいますが、戦争になったら、逃げるのも難しいと考えるようになりました。防衛力の強化や「米国との核共有」を当然のように主張する政治家たちに怒りでいっぱいです。8月1日にニューヨークで開かれた、核不拡散条約(NPT)の再検討会議で、岸田文雄首相は被爆国の代表でありながら核兵器禁止条約に全くふれませんでした。

ロシアは他国と対話を重ねて、一日も早い終戦を願っています。

『標的』 上映の出会い は点から線へ

七尾 寿子

6月18日帯広、19日釧路、自主上映会



誌面でも度々紹介されている、植村隆さんの裁判闘争を描いたドキュメンタリー映画『標的』。長い闘いが多面的に映画として記録され多くの人々が観る意義を噛みしめている。

104年の歴史ある大黒座（浦河町）

今、各地のミニシアターや、市民の自主開催で上映されて、西嶋真司監督、植村さんは、観客と交流したいと、上映に合わせて自費で全国を回って新たな出会いを紡いでいる。その訪問記は、『週刊金曜日』の「ヒラ社長が行く」に次々と掲載されているのでご覧いただきたい。

私も、6月に北海道の2つのミニシアターと、帯広、釧路の自主上映会に参加させてもらう機会があった。

6月12日 大黒座

浦河町の大黒座は、今年で104年を迎え、『小さな町の小さな映画館』（森田恵子監督、2011年）で紹介された町の歴史とともにある48席の映画館だ。三上雅弘、佳寿子さんご夫妻でクリーニング店も経営して大黒座を維持して



大黒座を運営する右から三上雅弘さん、佳寿子さん、あいこさん、植村隆さん

いる。私は前にも訪ねたことがあるのだが、観客が2、3人、0人ということもあるといい、その時も「お客さんが来なかったから」と映画館を閉めてから佳寿子さんも飲み会に来てくれた。

今回、上映の打診をすると、「やろうと思っていたんですよ」と言ってくれた。西嶋監督も「一度訪ねたかったのです」と本拠地の福岡から飛んで来た。1回目の上映は17人の参加。なんと次女のあいこさんが五代目を継ぐと言って、夫婦経営から一家経営になっていた。地域の人たちも大黒座サポーターズとして集う姿を見て、しみじみ街には映画館が必要だ、映画館で映画を観られるのは幸せだ、と感じた。

6月15、16、17日シアターキノ

キノはこの7月で開館30年を迎えるということで、記念出版『若き日の映画本』の最終推敲、イベントの準備、さらにオーナーの中島洋さん制作映画『Wakka』の完成を控えていた。

そこに裁判現地のひとつ札幌での上映ということで妨害があつてはと、弁護士が相談に乗って、3日間交代で張り付けてくれ、トークのゲストには、上田文雄さん（前札幌市長で、植村裁判支援の共同代表）や小野寺信勝弁護士（弁護団の事務局長）も参加してくれて、134人の観客があった。さらにその後、さっぽろ自由学校「遊」を借りての交流会にも夜9時開始にもかかわらず、3日間で45人の参加があった。

上映を引き受けてくれたのは、地域で長く平和活動や労働運動、地域づくり、『金曜日』読者会を続けて来た人たちだった。草の根のネットワークで広めたり、地方の新聞社に『標的』ポスタ



釧路会場で

ーを持ちこんでPRしたりで、遠くからも観に来てくれて、帯広60人、釧路108人の参加があった。パンフレットや本の物販をしながら、会場の後ろに座っていると、みなさんの映像に向き合う真剣さや、怒りや共感が伝わってきた。

以下は、釧路の観客が寄せてくれた感想の一部だ。

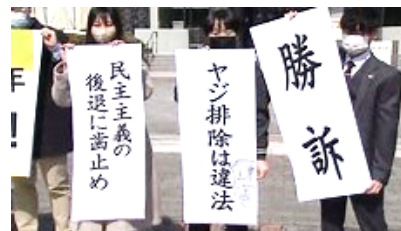
「ときに、司法の判断は、あんまりだと感じます。被害を受けた側が痛みを訴え棄却されると、裁判費用が残ります。受けた恐怖や実際の被害は全て被害者持ちなのだと感じる場面が多くありました」

「映画の中に描かれたことのほかに、個の幸福実現を妨げるものは一体何なのかと考える日となりました」

当初、放送局のディレクターとしての番組制作だった『標的』が、「慰安婦」問題が絡んでいるのでテレビで放送しないと断られ放送局をやめて映画として完成させた西嶋監督。各地での上映と挨拶が裁判の第二ラウンドだという植村さん。上映の各地は点だが、確かに繋がり、広がっている。

道警の責任を問う「ヤジ排除裁判」勝訴

高橋 雫



もう3年も経ってしまいましたが2019年7月15日（月）午後4時頃、「かでの27」で短歌の会

3. 25 ヤジ排除は違法と判決 「由紀坐左」が終

わり札幌駅へ急いで帰ろうとしていた時、札幌駅前では参議院選挙に出馬する'高橋はるみ'の選挙応援に鈴木直道や安倍晋三が街宣車に乗って何やら応援演説をしていました。特に一国の首相だからと言って魅力もなく、立ち寄って応援演説を聞くとも思わなかったもので、JRで帰宅しました。

その後です。道警のヤジ排除が大きく報じられ、HBCテレビ番組でも大きく特集が生まれ出したのは。様々な経過を経て2022年、3月25日（金）に判決が下される裁判が開かれる事になりました。札幌地裁の前には報道陣がカメラなどを準備していっぱい詰め掛けておりました。門を入れて直ぐ札幌地裁の写真を撮ろうとすると、警備員に「ダメダ



メ」と制御されて、危なくスマホを没収されるどころでした。傍聴席は27席だけですが傍聴席抽選で並んだ人数は87人。午前10時半から抽選開始でしたが、やっぱり外れ、傍聴出来ませんでした。判決の結果は夕方、大相撲の番組を見ながら今場所の優勝力士は誰かな・・・等と話し終わった午後6時頃、妻から「勝訴・勝訴」の声。道内のニュース案内で報じられておりました。(右上に続く)

原告の大杉雅栄さんは「政府の最高権力者を名指しで批判する言論・表現の自由が認められるかどうか、違法な暴力で言論弾圧を行った警察が裁判所に裁かれるのか、それとも治外法権が追認されるのか。つまるところ、この国は民主主義を続けるのか、それともやめるのか、それこそがこの裁判を通して問われていたのだ」と語りました。

先ずはこの勝訴でこの国は民主主義が続けられる展望が出て来たようです。原告の大杉さん、桃井希生さんお疲れ様でした。たくさんの勇気を頂きました。

さよなら！ 岩波ホール 愛を込めて 伊藤 功

札幌映画サークル紙「シネアスト」2022年7月号から許可を受けて転載しています。

岩波ホールは7月29日閉館が1月に報じられました。昨年2月には耐震性強化やスクリーンなどの改装を行い、再興を目指していたのに。

全国映連は長く総会、全国映連賞贈呈式を岩波サロンで開いてきましたので、私もよく訪れた馴染みの映画館の一つです。札幌映画サークルも自主上映150回記念(1985年)にユーゴ映画『歌っているのはだれ?』をお借りし道新ホールで上映、高野悦子総支配人をお招きして、エキブ・ド・シネマの歴史と意義を学びました。

その懇親会で高野さんは「岩波ホールは何をやっても満席にできている人も居るそうですが、私達は毎月5000枚のハガキを書いて会員に鑑賞を呼びかけているのです。サークルの皆さんの毎日の苦労は良く解りますよ」と、励ましてくださいました。現運営委員の方々には信じられないことなのでしょうが、当時は、忙しさのあまり映画を見る暇が、なかったのです。札幌映サは来年創立60周年を迎えますが、苦しい時に、「高野さんが見てくれている」と、何度思ったことでしょう。

私は閉館前にどうしても訪問して、お礼と感謝の気持ちを伝えたいと思ってきました。コロナがやや下火になった6月7日、上京して最後のプログラム『歩いて見た世界～ブルース・チャットウィンの足跡～』を鑑賞してから事務所を訪ねました。スタッフ



岩波ホールの歴史をたどる千代田図書館の展示の一部

の皆さんに押し寄せ続けたご苦労は、私が受け止めるには重すぎるものでしたが、新型コロナの影響とはいえ、閉館がいかに残念な結果であったかを、ひしひしと感じました。在室されていた方に当日のパフレットへのサインをお願いしたところ、岩波律子支配人よりエキブ・ド・シネマNo.233号『大地と白い雲』に、わがサークル宛のサインをいただくことができました。岩波支配人は「全国から反響があって、本当に申し訳ないと思うばかりで・・・。ここまで行き詰まって発表もしたので、やっぱり続けますとは行かないと思う。一旦は閉じるけれど、また新しい動きが出てきてくれればと、若い子に期待しています」との言葉を残されています。



千代田図書館で開催中の「岩波ホールの歴史」を見学しながら、今、私達は何を失おうとしているのか、を考え続けました。

スタッフの皆さんが切り開いた道を、必ず引き継いで、若い人達に渡すバトンを、私は持ち帰ったのです。



絵・近藤久子さん



絵・堀泰雄さん

Books



市民が目指す民主主義

気候民主主義

次世代の政治の動かし方

三上直之著 岩波書店

2,310円

私が地球温暖化に関心を持つようになったのは、14年前の2008年、日本山岳会のヒマラヤ環境調査に参加したことです。氷河が溶けて氷河湖の拡大が深刻だということで住民の意識調査に参加しました。ルクラからトレッキングしながら、ナムチェでシェルパ族の方の自宅でお話を聞いたことが懐かしいです。

気候変動が具体的な脅威として私たちに迫っています。6月だというのに40度近い暑さが各地で観測されました。年々厳しい暑さと各地で豪雨が頻発。住民の暮らしが脅かされています。

「気候市民会議」は近年フランスやイギリスなど欧州各国で浸透する試みです。2018年、一番最初に声を上げたのが、スウェーデンのグレタ・トゥーンベリさんでした。「気候のための学校ストライキ」を起点として、世界中に広がりました。政治に関心がなかった若者の心を惹きつけましたね。

差し迫った現実に対処するために「気候民主主義」への転換が不可欠だと、北海道大の三上直之准教授（環境社会学）は強調し、展望と課題は何かを説きます。聞きなれない言葉に戸惑いましたが、三上さんが市民と進めてきた会議と知って、これぞ民主主義だと思いました。

三上さんは2020年に「気候市民会議さっぽろ2020」の実行委員会代表を務めました。無作為に選ばれた10～70代の市民20人が専門家らの講義を受けた上で、自治体はいかに脱炭素社会を実現するか、自分たちの生活様式をどう変えるかといった気候変動に関わる議題について、数回にわたりオンラインで意見を交わしました。取りまとめた結果は札幌市の担当者に提出され、翌年3月に市が発表した気候変動対策の計画では、その一部が盛り込まれました。知っていたら市民会議に参加してみたかったです。

三上さんは各地で同種の取り組みが増えてきていることに手応えを感じる一方、気候危機に現実的に対処するためには「やっただけ」で終わらせず、民主主義制度自体のあり方を再考しなければならないと語ります。いくら市民が熟議を重ね、優れた提案にたどり着いたとしても現状ではそれを反映する意思がなければ絵に描いた餅に終わるからだと言います。三上さんは「国の将来を左右する重大な課題には、人々が直接、意思決定に参加できる機会が要る。国民投票などの方法も検討すべきだ」と説きます。気候変動をなすがままにしているとは思えないと思います。(み)



金子文子とミアのストーリーが並行して進む

両手にトカレフ

ブレイディみかこ著 ポプラ社
1,650円

現代のイギリス、ブライトンに住む14歳の少女ミアは14歳。貧困や家族問題など困難を背負いながら、図書館の本で〈カネコフミコ〉という日本人女性に出会い、希望を見出していく物語。

ブレイディみかこさんはノンフィクション『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』で息子のことを書きました。その息子から「現実にはクラブ活動すらできない子どもたちがたくさんいるよね」と言われたことが突き刺さったとインタビューに答えています。

生活保護のお金を薬物に遣ってしまうミアの母。まだ幼く、いじめられっ子である弟、貧しい人のためのボランティアをしており一家を気にかけてくれるゾーイ、ミアの詩をラップに乗せたいと願う音楽好きの同級生ウィルなど、さまざまな人物が登場します。現代を生きるミアの視点と、ミアが読んでいる文子の刑務所回顧録をなぞるパートとが交互に書かれ、ふたりの少女の軌跡と闘争が重なっていく。

ブレイディさんは「母親に連れられていった古書店で見つけたのが金子文子さんが書いた『何が私をこうさせたか一獄中手記』だった。みずみずしい文章に、それまでの文子の印象が一変した」と語っています。文子は大正期の「アナキスト」で大逆罪で逮捕、有罪となり獄死しました。

周囲から距離を置くミアにある日、同級生のウィルが「ラップのリリックを作って」と頼みます。最初は反発するミアですが、ミアの言葉を待ち焦がれ、理解しようと耳を傾けるウィルの姿に、心を開いていきます。ウィルとブレイディさんの息子が重なります。

ウィルはミアとは違う、ミドルクラスの家の子ですが、同じ教室に多種多様な人間がいることで、階級を飛び越えて出会っていくという設定がとてもいいです。

ブレイディさんのこの本にこめた思いをインタビュー記事から抜粋します。「子どものとき、私はここではないどこかに、もっといい別の世界があるんだと思っていました。でもそうじゃなくて、ここにあるこの世界を変えていくんだって今は思うんです。子どもたちに『この世界はここから変えられる』と信じてほしい。この小説からそんな思いが伝わればうれしいです」

金子文子の著書も読みたいです。(み)



夕張岳の花たち
阿部博子さん撮影：左からユウパニコザクラ、シシバクスミレ（6月）

自由に生きたいと願い続けたキムさんの不屈の人生



「ナパーム弾の少女」五〇年の物語

藤えりか著 角川書店 1,980円

ナパーム弾を浴びて泣きながら逃げる少女を撮った写真が報道されて50年。

ピューリッツァー賞を受賞して、当時、ニュースで公開され私も見た記憶があります。ベトナム戦争の恐怖と残酷さが伝わってきました。

ベトナムでは枯葉剤の被害も甚大でしたが、全身に大火傷を負いながら現在も健在と知ったのは本書ででした。キム・フックさんの波乱に満ちた人生が描かれます。

キムさんは重傷を負いながらも助かりますがベトナム政府から常に監視され自由に発言できませんでした。キューバでは留学生のベトナム人、トアンさんと結婚。その後、カナダに亡命。過酷な人生を生き抜き、現在も健在です。写真を撮ったのはAP通信サイゴン支局のベトナム人記者ニック・ウトさんでした。

キムさんには人を惹きつける力がありました。苦難の時に必ず助けてくれる人と出会うのです。ベトナム首相のファム・ヴァン・ドンは親身に相談に乗り「これから君は私の娘だ」と大事にしました。助けてくれた人々は数多くいます。

キムさんは戦争の悲惨さを象徴する存在で、メディアから数えきれないインタビューを受けましたが、ベトナム政府には政治的に利用され、希望が持てませんでした。ベトナムを離れ何年も家族とは会うことができませんでした。

カナダで、キムさんはクリスチャンとなったことでいつも怒っていたのに人を許します。私も昨年クリスチャンになったばかりで、キムさんの気持ちがわかるような気がしました。こんなふうになってほしいと祈ると気持ちで安らぐようになりました。キムさんの母も夫のトアンさんも最初はキリスト教には理解がありませんでした。今は良き理解者です。

キムさんはナパーム弾の恐ろしさを身をもって知る一人として世界中で平和の大切さを訴えています。並行してニック・ウトさんの人生も描かれます。戦場カメラマンとして活躍しますが、2度も負傷します。その後アメリカの新聞社に移動し、国籍もベトナムからアメリカに変えて、ベトナムからアメリカに逃れた女性と結婚もします。キムさんとの再会や交流に胸が熱くなりました。

著者の藤さんはあとがきで、「自由な社会にあって、国家と個人を自ら一体化して憚らず、強い権威に進んで従属する人たちも目立つ。子どもたちにはもう同じ思いはさせたくない」と並々ならぬ強い意志で敢行したキム・フックさんの『自由への逃走』を、そうした人たちはどう見るだろうか」と記しました。

自由に生きたいと強く願い、実現させたキム・フックさんに大きな励ましを貰いました。(み)

「共に生きる社会」にするために



あなたのルーツを教えてください

安田菜津紀著 左右社 1,980円

差別や偏見によるヘイトスピーチ

やヘイトクライム、入管収容問題など、今日の日本社会に深く巣食う「分断」をあらわにする事件が起きて続けています。多様な人びとからなる私たちの社会を、どのように「共に生きる社会」にできるのか。その問いを胸に、安田さんは15人のルーツやアイデンティティと向き合ったルポルタージュです。自身のルーツについても綴っています。

2021年3月、名古屋入管内で亡くなったスリランカ人女性ウイシュマ・サンダマリさん。なぜ彼女は命を奪われなければならなかったのか。ウイシュマさんのことは記憶に新しく、大きな夢を抱いて日本に来たのにどうしてこんなことになってしまったのかと残念でなりません。ウイシュマさんは病気で動けない状態なのに、職員は救急車も呼ばず放置した罪は許せません。彼女が生きてきた証をたどるために、安田さんはスリランカに行き、ウイシュマさんの家族や、親しい人たちに会い、誰からも愛され、教師になることを夢見て努力していた姿が浮かび上がります。

もう一人紹介するのは、川崎市で「ふれあい館」の館長を務める崔江以子(ちえ・かんいちや)さんです。宿題に集中する子どもたちもいれば、ただそこでおしゃべりをしている高校生、運動ができる部屋で駆け回る小学生たちもいて、それぞれが思い思いの時間を過ごす大切な場です。今は落ち着いていますが、裁判で勝つ前までは、ネット上で江以子さんは悪質な攻撃にさらされます。「ナタを買ってくる」「チョーセンはしね」と、身体的な危害を加えんとする脅しの書き込みを、2016年2月から毎週末、1年半に渡って続けたという。こうした書き込みが心身をすり減らし続け、「江以子さんは片耳の聴力を失うなど、精神的な影響が体にも表れていた。表札をはずし、小学生だった次男が自身の子どもだと分からないよう、玄関から一歩出ると別々に歩き、バスに乗っても離れて座り、『他人のふり』をしなければならなかった」とありました。自分がそんな目にあったら、生きていられたらどうか？と体が震えました。

新聞記者だった植村隆さんが慰安婦問題を書いたことで激しいバッシングにさらされたことと重なりました。

「差別がないことが、一番幸せ」ハルモニたちの様子を見守る江以子さんの「ルーツは、託されたバトンだと思います。受け取ったバトンをどう次の世代につなぐのかも含めて、託されていると思うんです」という言葉に知性や温かさを感じ、応援したい気持ちでいっぱいになりました。

ゾツとする未来
我が身はどこに
『プラン75』
樋口 みな子

札幌映画サー
クル会報
シネアスト
2022年8月号
掲載



映画の舞台は近未来の日本。75歳を迎えた人々に「命の選択」ができる制度「プラン75」が導入されます。政府が旗振り役となり推進するのですが、徹底した

議論が行なわれないうで、既成事実化してゆく様子が描かれます。まるで『檜山節考』で描かれた物語を現代に置き換えたかのような、残酷なディストピアを描きます。

私は、近くの映画館で観ました。60席ぐらいの小さな会場でしたが、私と同世代と思われる夫婦などで満席。いつもは空いているのに、カンヌ国際映画祭で特別表彰を受けたことでマスコミでも取り上げられた影響でしょうか。そうであるなら、もっと大きな客席で、若者も一緒に観てほしかったです。

新人監督の早川千絵さんの、社会を冷静に見る目は圧巻でした。本作はその「命の切り捨て」に対する強烈な違和感や怒りが根底にあります。

冒頭では若者が高齢者施設を襲撃しますが、2016年に施設の職員が起こした「相模原障害者施設殺傷事件」を想起させます。そこにかぶさるように、ニュースで「プラン75」が政府から発表されます。淡々と語るアナウンサーの声は、現実のニュースのようで胸に突き刺さりました。

主人公のミチ(倍賞千恵子)は78歳。夫と死別し、ホテルの客室清掃員の仕事をしています。彼女は同世代の仲間と一緒に、この巨大なうねりに巻き込まれていくのです。私も70代。気味がわるいほどリアルで、私も渦中の人になったようで怖さで体が震えました。

ミチは同じひとり暮らしの友人と、生き生きと働き、仲間とカラオケを楽しみますが、突然、仕事を失い住む場所も追われそうになります。さらに友人が孤独死する現場を目撃して心が



揺れ動きます。ミチを演ずる倍賞千恵子は、セリフ以外の表情や佇まいで、心情を表現する演技が素晴らしい。言葉は少ないけれど、声がとてもいいです。

映画は、申請窓口や遺品整理、電話のサポートスタッフら、制度を推進する側の人間の素顔も掘り下げ、複数の視点から問題を見つめます。市役所で「プラン75」を推進するヒロム(磯村勇斗)は、何の罪悪感もなく、高齢者に対応していましたが、疎遠だった叔父が申請者となり、気持ちに変化が生まれます。尊厳死を選んだお年寄りをサポートするのはコールセンタースタッフの瑠子(河合優実)。ミチと親しく接するうちに、彼女の人間性に触れていきます。3人目はフィリピン

人介護士のマリア(ステファニー・アリアン)。彼女は子どもの手術費用を稼ぐため、「プラン75」で尊厳死した人の遺品整理係として働き始めますが、やがてその実態を知るようになります。こうして若者たちの心が大きく動き出し、人としての感覚を取り戻していく気づきが社会を変える希望に思えました。

昨年観た『護られなかった者たちへ』を思い出しました。瀬々監督は「大震災」という天災の理不尽さと生活保護制度の中の理不尽さ。そこ



で護られなかった者がどう生きていくのか」という原作のテーマを映画にしたいと考えたことを語っています。ある場面で、生活に困窮したけい(倍賞美津子)は生活保護を申請しますが、受給を巡って、市役所の扶養照会の残酷さを鋭く照らしました。知られたくないことまで問い詰める必要があるとは思えません。受給できなかつたけいの死の覚悟に涙が止まりませんでした。けいに家族のように世話になった青年が「死んでいい人なんていないんだ」と叫んだ言葉が忘れられません。

生産性のない人々は生きる価値がないと言わんばかりの無言の圧力を感じている人は多いのではないのでしょうか。ウクライナ侵攻で、防衛費をさらに増やそうとするよりも、高齢者も障害者も命を生き切ることがリスペクトされる社会のために国税を使ってほしいと思いました。開拓農民であったやんちゃな私の祖母は、何度も老人ホームを脱走して娘たちを困らせましたが、100歳の人生を生ききりました。祖母の豊かな知恵に私も助けられたことがあります。葬儀の時に集まった親族たちの笑顔がそれを物語っていました。私の誇りです。

ミチが、山あいに沈む夕日を眺めながらささやくように歌う「リンゴの木の下で」の歌詞、「明日また会いましょう」のフレーズが心に沁みました。アンヌ・クロツツの編集と音楽レミ・ブーバルの音楽は、さすがフランスと思わせる洗練さも素敵でした。

2022「PLAN75」製作委員会/Urban Factory / Fusee



対話で終戦に

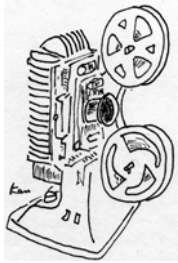
わたしの心のレンズ
現場の記憶を紡ぐ

大石芳野著 集英社インター
ナショナル新書990円

大石芳野さんは約半世紀にわたり、戦争や内乱後の人々を訪ね、写真と証言で伝えてきました。ベトナム、カンボジア、アウシュヴィッツ、そして広島、長崎、沖縄など。コロナ禍によって取材がままならない中、大石さんは一旦立ち止まりそれらの場所を振り返ります。何十年も前に終わった戦争を体験した人に会うと「昨日のこのように覚えている」と語ったとあり胸に刺さりました。

大石さんは「人間だけでなく生きとし生けるものすべてのに精霊などがあって、自然界と共存していること」の大切さをパブアの人々から学んだ。その体験が、人間の根源的な魂のあり方を暴力で叩き潰された人々の嘆きや苦悩と向き合い、伝えていかなければという思いに突き動かされて進むことができた」とありました。大石さんの写真には人間の尊厳が写し出されていると思います。

教育への政治介入を糾弾



当初はテレビドキュメントとして

作成され、17年ギャラクシー大賞、18年「地方の時代」映像祭優秀賞を受賞した作品に、最新の事情を加えて再構成しています。

齊加監督は関係者の証言と多数の資料で国が教育にかけた圧力と介入を糾弾します。齊加さんは毎日放送で20年以上にわたり教育現場を取材。教科書の編集者や執筆者へのインタビュー、慰安婦問題など加害の歴史を教える教師や研究者へのバッシングなどを通し、教育現場に迫る危機を描き出します。

2006年、第一次安倍内閣は教育基本法を改正しました。愛国心がもり込まれ、教科書への政治介入が進められました。道徳の教科化、教科書検定における圧力、日本学術会議の委員任命拒否問題、「慰安婦」問題を教える中学校教員や、沖縄問題を研究する大学教授への激しいバッシングなど。従軍慰安婦や朝鮮人強制連行の記述は削除されました。不都合な「従軍」を削って「慰安婦」に。「強制」を削って「連行」としたのです。事実に基づいた記述を続けた、最大手の教科書会社は倒産しました。

私の夫も定年まで中学理科教員でした。夫は「教科書が面白くなくなった」と語り、いつもさまざまな実験を通して考える力をつけようと努力していましたが、「管理教育が強められた」と語っていました。社会科で間違った歴史観を教えるのは苦痛以外の何物でもありません。映画に登場する平井美津子さんは圧力に屈しませんでした。その勇氣に感動しました。

齊加さんは「2006年高校日本史の教科書検定において、沖縄戦での『集団自決』についての記述に検定意見が付き、日本軍による命令や誘導があったと取れる記述が削除されるという出来事があった」と述べています。都合の良いことばかりを押し付ける歴史観は再び戦争への道だと思えます。学術会議の任命拒否に怒りがこみ上げました。学問への政治介入は許せません。自由にものが言え、負の歴史を学び、二度と戦争はしないために力を尽くさなければと思えました。

学校は管理が強められ教員になりたい人が激減しています。中高校生の未来はどうなるのだろうと心配です。今観るべき映画です。

教育と愛国 齊加尚代監督



共に生きようという
思いを込めた

スープとイデオロギー ーヤン ヨンヒ監督



「スープに象徴される家族の営みが、国家や民族のイデオロギーを克服する可能性も提示した」とヤン ヨンヒ監督はタイトルに思いを込めました

オモニはヨンヒに語り始めます。1948年、18歳だったオモニの体験です。「あっちこっちから射撃の音がバァーンバァーンって……」。監督も知らなかったという武装蜂起に端を発し、島民多数が犠牲になった「済州島4・3事件」でした。オモニは必死に生き延びて日本に。結婚して4人の子どもを育てました。息子3人を北朝鮮に送り、送金を続けてきました。娘のヨンヒ監督はそのことが理解できなかったと言います。オモニが凄惨な虐殺を語った後、認知症が進みます。

ヨンヒ監督の結婚衣装も披露されます。夫は日本人のフリーライター荒井カオルさん。この映画のプロデューサーです。

70年ぶりに済州島に行くことになったオモニと追悼式の参列には荒井さんも同行しました。3人で虐殺の跡をたどる場面で、記憶を無くしているオモニに変わって全身でその残酷さを受け止めたのは娘であるヨンヒでした。

ヨンヒは「現地に来ているとあまりにも惨い話で…….こんな故郷を抱えてどうやって生きて来たのか想像もつきません。私は心の中で母を責めて来ました。なぜ3人の兄を行かせるほど、北朝鮮を信じたのかと。でも4・3を知ったら母を責められなくて」と語ります。

誰にも長い間語れず生きて来た、オモニの強さとやさしさに涙があふれました。忘れられた悲劇をオモニの生き方を通して伝えて圧巻！

生死をかけた脱出 を描く

モガディシュ

脱出までの14日間

リュ・スンワン監督



1991年、ソマリアの内戦が激化し、反乱軍が首都のモガディシュを制圧。空港は封鎖され通信網が断たれる中、命の危険にさらされた外国人たちは、生死をかけて脱出を試みます。2021年にアフガニスタン政府が崩壊し、タリバンが政権復活を果たした時や、まさに今年のウクライナの緊張状態と同様の状況です。

だが、その中に脱出劇の真実を公には語れなかった人々がありました。ソマリアに駐在していた韓国大使とその家族たちです。いったいどんな運命のいたずらか、激しく敵対していた北朝鮮の大使たちと、脱出への死闘を共にすることになります。近年になってようやく事件の顛末が公表され、知られざる事実への丹念なリサーチが行われ、映画化が実現しました。

ソウル五輪で大成功を収め、韓国政府は国連への加盟を目指し、多数の投票権を持つアフリカ諸国へのロビー活動に励んでいました。ソマリアの首都モガディシュで韓国大使を務めるハンは、現地政府の上層部に何とか取り入ろうとします。一方、韓国より20年も早くアフリカ諸国との外交を始めていた北朝鮮のリム大使も国連加盟のために奔走し、両国間の妨害工作や情報操作はエスカレートしていきます。

そんな中、ソマリアの現政権に不満を持つ反乱軍による内戦が激化。暴徒に大使館を追われた北朝鮮のリム大使は、絶対に相容れない韓国大使館に助けを求める決意をします。果たして、ハン大使は彼らを受け入れるのか、全員で生きて脱出することができるのか、そしてその方法は。

脱出を目指して繰り広げるカーチェイスは手に汗握る展開。あまりにもリアルで「助かって！」と祈る思いでした。撮影規模の大きさにとっても韓国映画とは思えなかったです。光州事件など政治物が得意な韓国ですが、ソマリアの内戦シーンが生々しく、韓国の人々はこの映画で自国の苦難の歴史を振り返ったのではないのでしょうか。南北が連帯して無事に韓国と北朝鮮に帰ることが出来たのです。命が最優先されたことに感動しました。ウクライナの人々に思いを馳せずにはられません。是非そのことを伝えたくて紹介しました。



小野有五さん「顕著な実践賞」

北大名誉教授、国際地理学連合の新賞を受賞 / 朝日新聞北海道版
8月5日記事から抜き書きします。

写真提供・樋口みな子

国際的な学術組織「国際地理学連合」(IGU)が今年から新たに設けた賞に、札幌市の小野有五・北大名誉教授(74)＝自然地理学＝が選ばれた。千歳川流域の治水事業をめぐる、1980年代に計画された千歳川放水路計画に反対して、自然環境を守る遊水地を提唱して実現につなげたことが評価された。

小野さんは「科学者として、自分の研究を社会にいかす活動が認められてうれしい」と喜んでいる。

小野さんが受賞したのは「顕著な実践賞」。創立100周年を迎えたIGUが今年から新設し、地理学の研究成果を社会貢献に役立てた科学者に贈られる。小野さんと英国や中国などの4人が受賞し、7月にパリで授賞式が開かれた。

受賞理由に関わる千歳川放水路計画は、82年に北海道開発局が立てた治水対策だ。

石狩川に合流して日本海に注ぐ千歳川流域は、たびたび水害に見舞われてきた。そのため、40キロにも及ぶ放水路を造り、千歳川の水を太平洋側に流して洪水を防ごうとした。

一方、近くにはウトナイ湖(ラムサール条約登録湿地)などがあり、環境への影響を懸念する自然保護団体や漁業者らが反対の声を上げ、賛否が分かれていた。

当時、北大大学院の環境科学研究科助教授だった小野さんは、半年かけて現地を調査。放水路の効果を認めつつも、環境への負荷がより大きいとして、「流域を越えた治水対策で間違いだ」と結論づけた。さらに古地図などを分析し、洪水時は低い土地に水を流してため

る「遊水地」を代替案として提唱した。

当初は遊水地で浸水する土地所有者らの反発を受けたが、「これしかない」と10年かけて説得を続けた。議論の結果、国は99年に放水路計画の中止を決定。代わりに遊水地を組み合わせた治水事業に転換することになった。

千歳川遊水地群の整備事業は2008年度に始まり、19年度に完了。遊水地は4市2町の6カ所に設けられた。その一つ、長沼町の舞鶴遊水地にはタンチョウが飛来するなど自然との共生が進む。

(略)

今回の受賞を受けて、小野さんは「河川工学が中心だった洪水対策で、地理学も大きな働きができることが証明できた。SDGs(持続可能な開発目標)を30年前に先取りしたことが評価された」と喜ぶ。

その上で若い科学者たちに「国などの政策に反対すれば、研究予算やデータがもらえないこともあるかもしれない。それでも、研究室に閉じこもるのではなく、社会を良くするために自らの研究を積極的に広めていくことが必要だ」とエールを送る。(中野龍三)

あとがき ★介護と言っても、夫は体が動かせる

ので自宅にいても負担は少ないかもしれません。それでもデイサービスがなければとても続かなかったと思います。★編集の真ただ中、デイサービスの日を利用して、8月6日手稲山に登ってきました。手稲駅で友人に拾ってもらいました。1年ぶりの登山はスキー場コースで、行きは2時間、帰りは45分でした。筋肉痛がちょっと辛いですが楽しかったです。★さまざまな市民運動で私たちを力づけてくださった小野有五さんが、「顕著な実践賞」に選ばれました。とても嬉しいです。(み)



8月6日
手稲山頂上から遠くに雄大な羊蹄山が見えました。

購読料と寄付をありがとうございます(敬称略)
6, 21~7. 26

則末尚大 堀康雄 鈴木澄江 山口力三 伊藤誠一
マシオン恵美香 齊木登茂子 富盛保枝
カンパも含めて30,000円は印刷と送料に使わせていただきます。郵便振替「銀河通信」02740-7-56535
年間2,000円です。振替手数料がかかるようになり印刷通信を維持するのが大変です。web読者は無料ですが1000円以内でカンパも歓迎します。

各地の話題など読者のみなさまの投稿お待ちしております。1500字以内で写真もお願いします。